

D.J.に群れる無数のビルが、全部暑さで溶けてしまったならどうなるだろう——そんなくだらない妄想に耽る折があるくらいには、今夏のキヴォトスは酷暑に見舞われていた。今日は午後から外出しなくてはならない用事がある。シャーレの先生はそのことを少し憂鬱に思いながら、デスクに向かい合って書類作業に励んでいた。

先生は窓の方を一瞥し、青空に浮かぶ波紋のような円がくつきり見えるのを確認すると、どうにも今日は曇りそうにない……と、ため息を一つ吐いた。そのため息が流れた先には、ソファに寝ころんでスマホを眺めながら、したり顔で笑みを浮かべる生徒——荒嶺ヤクモがいた。

「調子良さそうだね、ヤクモ……」

快晴のわりに気分が塞ぎ込んで、作業が捗りそうにもなかったので、先生は休憩とばかりに席を移してヤクモの隣に座った。

「ええ、ええ、絶好調ですとも！ このまえのデジタル書籍の事業がうまいこと儲かってましてねえ」

そういうええ、前にレッドウインターでヤクモと会った時、そんなこともあったなあ先生は思った。

「そういう先生の方は、少し憂鬱そうですね？」

「はは、午後から外出しなくちゃいけないってね、このごろは暑くて暑くて……ヤクモは暑いのは平気？」

「そうですねえ、あまり苦にしたことはないかも？」

「そうなんだ、いつも厚着しているように見えるけど」

「ほら、私は獣種ですから」

ヤクモがぴこぴこ、と耳を揺らした。

「特段意識したことはありませんが、他の生徒よりは、体温調整が上手くいくのかもしれない」

「なるほど、羨ましい……」

「そうそう、暑さと言えば、レッドベアの夏の特集号を出そうかと思ひまして……」

「お生憎様、シャーレは中立主義だね」

「ちえっ、話ぐらいは聞いてくれてもいいじゃないですかあ——」

ヤクモと会話しながら、先生はシャーレのオフィスに備え付けてある冷凍庫から、アイスバーを二本、取り出した。

「暑さが平気なヤギさんは、アイスバーは好きかな？」

「おや、中立主義ではなかったのですか？」

「先生としてではなく、私個人の親切心だよ、ヤクモ」

ヤクモはムフフと笑って、

「借金と病気以外は、なんでもいただきますよ」

少し冷たそうにアイスバーを頬張るヤクモを横目に、先生もアイスを頬張った。

午後の仕事も頑張れそうな気が、少しだけした。

* * * * *

先生が仕事を片付ける頃には、すっかり日も傾いていて、暑さもいくらか和らいでいた。腕時計に目を遣る。時刻は午後の六時三十六分。その割に外は明るかった。随分日も長くなった。

夕暮れの橙に色づく空、ビル、道路のアスファルト……を、ぼんやりと眺めながら、先生は帰路についていた。その時、スマホの通知音が鳴った。通知の主はヤクモだった。

『先生』

『お助けを』

そんな間の抜けたメッセージに、位置情報が添えられている。「どうしたの？」と返信をしても、返事がくる気配はない。ヤクモのことだから、ただのおふざけか冷やかしか何か、はたまた私を嵌めようとしているのではないか……先生はそう考えたが、万が一のことがあってはいけないので、様子を見に行くことにした。

メッセージで送られてきた座標に近づく度に、先生の樂觀的な思考は段々と削がれていった。

「……どう見ても、ブラックマーケットじゃないか」
今にも落ちそうなネオンの看板が不規則に点滅している。淀んだ空気が辺りを支配している。微かに香る硝煙の匂いが先生を焦らせる。本当のヘルプだったのかもしれない。先生はヤクモを一瞬だけ疑ったことを謝りながら、ヤクモの元へと駆け足で向かった。

辿り着いた場所は廃屋で、辺りはスケバンがうろついていた。彼女らの視線をかいぐりながら、廃屋の中に入ると、その奥に縛られているヤクモを認めた。

「助けにきたよ、大丈夫？」

「おお、助かります……」

後ろに回されてロープで縛られたヤクモの手にはスマホが握られていた。どうにか隙を見てメッセージを送ったのだろう。先生は急いでロープを解き始める。いつ外のスケバンが中に入って来るか分からない。

「今度は何をやらかしたの？」

「失敬な！ 私がやらかしたわけじゃないですよ！ どうしてそうすぐに私を疑うのです！」

「日頃の行い、かな……」

苦心の末、どうにかヤクモのロープが解かれた。

「おい、誰がいるぞ！」

その頃には、周りをスケバンに囲まれていた。後ろは壁で逃げ場がない。

「観念しろ！ レッドウィンターの出版部部长、荒瀬ヤクモ！」

「お前んとこのサイトの漫画、面白すぎるんだよ！」

「そうだ！ こんなに面白い漫画が一週間に一回しか読めないのは、どう考えても横暴だ！」

「毎日更新しろ！ さもないと、酷い目に遭わせるぞ！」

スケバンが好き放題に叫んでいる。その内容から、先生はおおよその状況を理解した。

「なるほど、これは……」

確かにこれはヤクモに非はない。滅茶苦茶な主張である。

「……後でメルにはファンメッセージとして伝えておくとして……困ったものですね、クレーマーというものは」

ヤクモは余裕そうな様子で一步前に出ると、懷からピストルを取り出した。

「私が非戦闘員のように見えたからって、武器を取り上げなかったのはぬかりましたねえ、ムフフ」

どうやらヤクモは戦うようだった。スケバンは意外そうな表情をしていたが、一番意外に思ったのは他ならぬ先生だった。ヤクモが銃を取り出すところは、滅多に見たことがなかったからだ。

ヤクモ一人だけで、この状況を切り抜けられるだろうか。先生が胸の内に抱えた不安を和らげるように、ヤクモはいつものように、にやりとした笑みを浮かべた。

「では、先生、指揮をお願いしますよ」

——ヤクモの戦闘スキルは、恐ろしいほどに高かった。

向かってくるスケバンを全員受け流すように倒してしまい、ヤクモのピストルが音を立てる度にスケバンが一人、また一人と倒れていき、あつと言う間に鎮圧してしまった。

「ひい、もう許してください!」

気づいた頃には、襲い掛かってきたスケバンはヤクモの手によって全員縛り上げられていた。

「ふむ……では先生、この人たちを矯正局に」

「きよ、矯正局!? それだけはなにとぞ、ご勘弁を……何でもします、何でもしますから!」

「ほう、何でも、ですか……では、例の私の電子書籍のサブスク、全員に向こう五年分前払いしてもらいましょうかね」

「ご、五年!? それはいくら何でも……」

「では矯正局に」

「は、払う、払うよ!」

「ムフフ、毎度あり♡」

先生は、人を狂わせるほどの漫画の存在を恐ろしく思うと同時に……目の前のスケバンたちを、少し

気の毒に思った。

* * * *

「いやーちょうど出版部の設備を一新しようと思っていたところだったんですよ、渡りに船、って感じですね」

シャーレのオフィスのソファに座るヤクモは、思わぬ臨時収入に満足そうにしていた。

スケバンたちとのゴタゴタが解決する頃には、すっかり時間が遅くなっていたので、今晚ヤクモはシャーレに泊まることになった。

「ま、五年は少しやりすぎましたかね。流石に強制サブスクの刑は少し軽くしてやるとしましょうか」

「いいの?」

「少し癪ですが……これで出版部にはもう突っかってこないでしょうし、あまりお金を搾り取りすぎると、貴重なお客様を失ってしまうことになりかねませんので、ね」

まったく、アフターケアまでしっかりしている。先生はヤクモの手際の良さに、ただただ感心するばかり

りだった。

「今日はお手を煩わせてしまつてすみませんねえ、先生。自分だけでどうにかできれば良かったのですが、まさか街中で不意をつかれるとは……」

「こういう頼り方をしてくれる分には、いくらでも頼ってくれて大丈夫だけど……ヤクモがあんなに動けるとは思わなかったよ」

「ムフフ、結局腕つぷしが強くなければ、契約を守らせるのも難しいですから……」

やっぱりヤクモは、未だ生徒の身でありながらえらく達観している節がある。どのようにしてそんな価値観を拵えたのか、そして、そんなに戦闘の腕を磨くまでに、どんな紆余曲折があつたのか……

先生はマグカップに淹れたコーヒーをひと口飲んで、ヤクモがこういう気質になるまでの、ヤクモの過去のことに思いを馳せた。

『チャンピオンを羨んだのも……才能がないと嘆きたいのも……誰なのでしょうね?』

いつだったか、ヤクモとタカネがトリニティでひと悶着起こしたときの、タカネの台詞……今のような、お金を第一に考えるようになる前のヤクモは、ど

んな生徒だったのだろうか? 私はあまりにもヤクモ

のことを知らなすぎる。ヤクモのことをもっと知りたい——コーヒーの苦みが味蕾にじんわりと染み込んでいく頃には、先生の中でこういう具合の好奇心が生まれていた。

「考え事ですか? 先生」

ヤクモがそんなことを言いながら、媚びへつらうように先生の肩を揉んでくる。

「ああ、ありがとう……」

「ふむ、1分500円でどうでしょう」

「お金とるの!？」

「まさかあ、冗談ですよ。大切なビジネスパートナーである先生のことをぞんざいに扱うなんて、とてもとて」

「ビジネスパートナーになったつもりはないけどね……」

「……今からなつてくれてもいいんですよ?」

先生が身体を翻して、ヤクモの方をじつ、と見つめると、ヤクモは「はいはい、わかってますよ」と言わんばかりに、両手を挙げてお手上げのポーズ。

先生は身体を元の向きに戻して、再び思案に耽つ

た。ヤクモはこういう抜け目ない調子をいつも崩さないから、自分から自分の中身を開示してくるなんてのは、なかなかありえないことだろう。しかし、シャーレの先生として、一個人の生徒に入れ込みすぎるのも、当然よろしくない……少しばかり考えた後に、こんな好奇心は些末なことだと割り切って、くずかごに投げ入れてしまうのが一番良い選択だと、先生はそう思った。しかし、一度芽生えた好奇心は、簡単に消えてはくれない。

そのうちコーヒーの熱で身体が温まってきた。宵闇に冷えた時間にはちょうどいい温かさだった。先生はその熱を契機に、昼間のD.C.の暑さを思い出していた。

このキヴォトスの暑い夏が、ヤクモの分厚い仮面を溶かしてしまったなら……そうすれば、私は穩便にヤクモをもっと知ることが叶うだろうか。そんな、荒唐無稽な思案をまた一つして、先生はマグカップを机の上に置いた。コーヒーはまだ半分以上残っていた。

「こうして恩を売り続けたら、いつか気が変わった
りしませんかねえ」

「どうだろう、腰のマッサージもしてくれたなら、もしかしたら気が変わるかも知ない」

先生が考えている間も、ずっとヤクモはずっと先生の肩を揉んでいた。律儀でかわいいやつ。

「以下、えっちシーンより抜粋」

「普段はお堅い様子でしたが、こちらは随分よわなようで……♡ ムフフ♡」

ヤクモはかなり興奮していそうだったが、自分の責めに先生が喘いでくれる様子を見て、いくら余裕が出てきたようだった。一方で先生はやられたい放題。今の身体の状態では、満足に抵抗もできない。

「それではこちらの方も……」

ヤクモは自分の上着に手をかけて、その豊満なおっぱいを露わにした。

「んしょ……♡」

服に引っかけたそれが一度上に持ち上がった後、重力に負けてどぶん♡ と下に落ちた。

……どれだけでかいのか。重いのか。レッドウィンターというお世辞にも肥沃とはいえない大地で、どうやったらこんなにすくすく育つのか……先生は余計なことばかり考えている。

ヤクモはブラジャーにも手をかける。微かに鳴る衣擦れの音と共に乳頭がまろび出る。ピンク色でぷっくりしたそれはぴんと尖っていた。先生は言わずもがな、ヤクモもどうしようもなく興奮している。

「さっきできなかった分も、とつくりと味わってもらいますよお♡」

ヤクモは先生の手を取って、その手を自分のおっぱいに当てさせる。先生の指がヤクモの肉に沈み込む。先生がそれを軽く握ってみると、更なる興奮が呼び起こされる。恐ろしいほどの柔らかさ……先生はいつの間にか、ヤクモのおっぱいを夢中になつて揉んでいた。

ヤクモも感じているのか、時折嬌声を漏らす。「んう♡」だの「あっ……♡」だの、それがますます先生の情欲を煽るし、ヤクモのおっぱいも、先生のペニスに負けず劣らず敏感なようだった。

「あ、あまり調子に乗らないでくださいねっ……♡」先生はもちろん調子に乗ったつもりなどない。ヤクモのおっぱいがもちもちすぎるのが悪いと思う。ペースを握られまいとしたのか、ヤクモは先生の手を一度止めさせると、先生の身体に覆いかぶさる。

そのまま先生の顔に、そのもちもちのおっぱいを押し付けてきた。

「ほくら♡ ほくら♡ 男の人は、こういうので喜ぶって聞きましたよお♡」

むにいいっ♡ と、先生の顔に乗っかる暴力的な重さ、柔らかさ。間髪入れずに女の子の甘い香りと、おっぱいの汗蒸れの匂いが混ざり合って、脳の奥の奥の方をノックしてくる。先生は必死になって息を吸い込む。

「やくん♡ がつつきすぎですよ♡ やっぱり先生は噂に違わず、おっぱいが大好きなへんたいさん♡ なんですねえ♡ おっぱいの匂い、いっぱい嗅いで、ばかになっちゃいましょうねえ♡」

* * * *

ペニスにコンドームが被せられて、先生とヤクモの身体が繋がった。

「んおっ♡」

ヤクモが喘ぎ声を漏らした。……随分汚い声。あまりに気持ち良かったのか、ヤクモは腰をへこへこ♡ と動かすばかりで、さっきまでの責めの勢いがまったくない。おまけにその顔はすっかり惚けた様

子で、口からは涎が垂れている。今度余裕がなくなつたのは、ヤクモの方だった。

先生のペニスを受け入れたヤクモの蜜壺は、先生の子種を搾り取ろうとペニスに絡みついている。しかしただ挿入しただけで終わっているの、先刻までおっぱいに苛め抜かれたペニスは、少し物足りなさを感じている。

ヤクモは気持ちよさの余韻に浸っているのか、まだ動かない。業を煮やした先生は、繋がったまま、ヤクモを再び押し倒す。ふつつと湧いて出てきた嗜虐心が、先生の背中を押す。

「先生……♡ ま、待ってください……♡」

ヤクモだつて待たなかった。当然、待たない。

「おうっ♡」

先生は無我夢中で腰を振った。謀略も配慮も理性もすべてが消え失せて、ただ気持ちよさだけがヤクモと先生の身体を満たした。

「んひっ♡ んぐう♡ やめっ♡ やめへくらしいっ♡」

ヤクモの言葉に反して、ヤクモの下の方は先生のペニスをがっちりつかんで離さない。